

名人の決断

羽生善治名人に森内俊之九段が挑む第69期名人戦・7番勝負が行われています。

共に40歳同士、天才と天才が火花を散らす闘いです。結果はどうか、素晴らしい試合を期待したいものです。

私は、子どもの頃少し将棋をした経験がありますが、なにしろ手筋が読めない。数手先しか読めず、なおかつ自分に都合の良いようにしか読みませんから、全く強くない内に将棋から離れてしまいました。

プロ棋士がイベントなどで目隠ししながら対局する場面を見たことがありますが、一体彼らの脳みその中はどうなっているのでしょうか。多分、頭の中には将棋盤があって、何百という差し手を読んでいるのだろうと想像したくなります。しかし、羽生名人の話によれば、プロ棋士というのは1時間くらい考えれば500手とか1000手、2000手ぐらいは読めるそうですが、そのプロ棋士でさえ、実戦の場面では10手先の局面を想定することはできないのだそうです。つまり、将棋のプロは沢山の手が読め、先の全てを見通して一手一手指していると思われがちですが、実際はそうではなく、10手先の展開も読めない五里霧中の中で、一つ一つの決断をしている（羽生善治著「決断力」）とのことで、想像とはかなり違うようです。

将棋を指す上での決め手は何かといえ、それは決断力だそうです。もっとも、決断力といえ、将棋の世界に限らず、我々の仕事を含めて全てに共通することではあります。

そして、誰しも決断するためには情報を必要としますが、羽生名人は「判断のための情報が増えるほど正しい決断ができるようになるか」といって、必ずしもそうはいかない」といっています。必要なことは、山ほどある情報の中から自分に必要な情報を選ぶのではなくて、如何に捨てるかということの方が重要なのだそうです。そして、捨てるにあたって必要なことは「直感力」と「感性」、要するに大局観であるとしています。「直感力」や「感性」がそう簡単に身に付くとは思えませんが、羽生名人は努力の人ですから、まさに努力の積み重ね

の上に磨かれた力といえるでしょう。

また、決断にはリスクが伴います。これも全ての世界に通じる話ですが、世の中を見渡せばリスクを避けようとする人が多いように感じます。リスクを背負って決断する、こういう人材を育てることも教育の重要な仕事だと思います。

プロの世界は、一手で逆転してしまう厳しいものです。命のやりとりこそしませんが、棋士の皆さんは、一手一手に渾身の力を込めて勝負をしています。

こうした中で、羽生名人は「自分の得意な形に逃げない」といっています。それは、楽な道を選ばないということであり、常に未来に向かっての挑戦者であり続けたいという、名人の清々しいまでの心意気に外なりません。脱帽です。

（塾頭 吉田 洋一）